

平成29年 9月10日

第152号

NJ素流協 News

平成29年 9月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成29年度NJ素流協林業経営講座(前期) 福島県視察研修にて

小径材・D材の活用現場を見る

「A材からD材まで、様々な品質の様々な樹種をもれなく販売し、山元へ利益を返す」。当組合のモットーであり、これからの木材利用の鍵でもある。

本誌第150号では、青森県平川市の津軽バイオチップ(株)と、岩手県一戸町の(株)一戸森林資源の取り組みから、工場端材の背板や短コロを、木質バイオマス発電用の燃料材として活用する試みをお伝えした。

今般、当組合では林業経営講座(前期)を開催し、組合員・役職員25名が参加した。福島県において、小径材等を土木・造園用資材として専門に加工する工場及び林地残材の集荷・運搬を実践している企業の先進事例の視察研修を行ったので、その内容をご報告します。

**1日目 遠藤林業(株)本社工場
土木資材専門の木材加工工場**

8月24日、東北新幹線新白河駅に集合し、最初の視察地である福島県石川郡古殿町の遠藤林業(株)本社工場へ向かった。同社は国産材で土木用資材を専門に加工する、東北地方でのトップ企業である。この日は代表取締役遠藤秀策氏自ら工場内を案内してくださった。

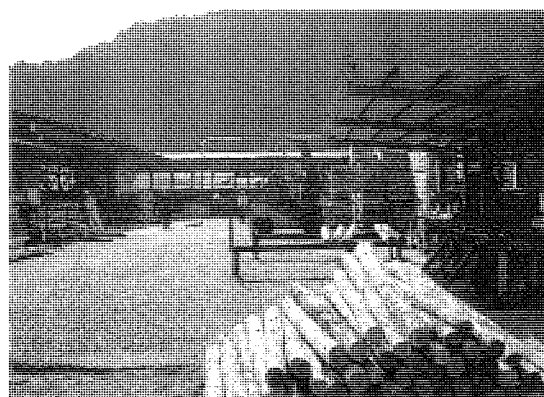


遠藤社長は昭和49年生まれ

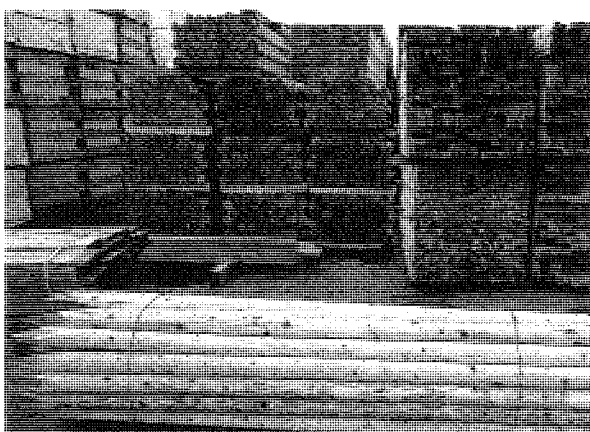
▽多様な製品で土木現場を支える

本社工場が位置するのは福島県中通りの山あいの町であるが、国道を小一時間も南下すれば茨城県という好立地である。同社には福島県内にもう1工場あるほか、岩手県八幡平市、秋田県大館市(2工場)、青森県

平川市にあり、合わせて6工場従業員約170名、年間約30万㎡の原木を加工しているという。



本社工場内にはあらゆる種類と寸法の製品が



加工しているのは、土木・造園用の木杭、掘削工事の土留めに使用する矢板、矢板を固定する楔(くさび)、バタ角などで、端材は最終的にチップ、オガ粉にする。完全受注生産で、土木現場からの多様な寸法・数量の注文に対応しているとのこと。工場はラインを組まず、複数の建屋に各種加工機械を置き、加工工程間の移動はフォークリフトで行っている。



丸棒加工機に角材を投入する。「十何年この仕事をしています」

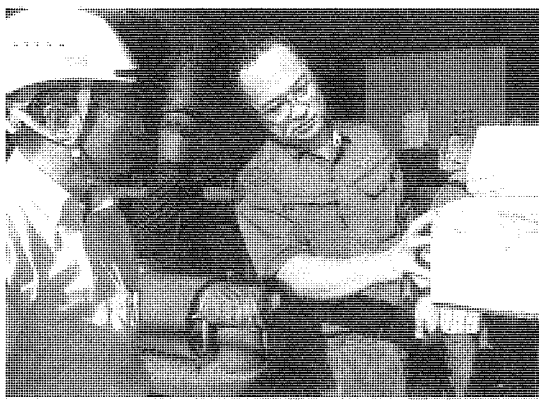
原木は、主に地元市場のスギのほか、長野県等からカラマツを仕入れ

ており、また資源の豊富な北東北の各工場では、各々の地元からも原木を買い入れているとのこと。

製品の配送先は関東から北陸に及ぶが、自社でトレーラーやトラックを持ち、帰り荷を積むことで輸送コストを圧縮している。

▽手作業だからこそ柔軟に

杭加工の主役、丸棒加工機を見せただけから、加工機で丸く削るとのことである。

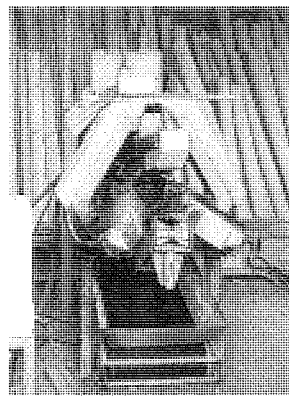


「角に落としてから丸く削る」作業能率を高める工夫

「14 cmの杭を作ろうと思えば16 cmの原木を削らねばならないが、周囲を全部削るより、ある程度落としてか

らの方が加工機への負担が小さく、時間も断然早いので」と遠藤社長は説明された。

このほか、杭の先端を三角に尖らせる三面削り(先付け)を社長自ら加工機と丸鋸で実演してくださいました。「手で持てる径の杭は、こうして手作業でやっていますよ。2台で1日2000本は作ります」。



アナログ感ある先付加工機

土木資材を一手に引き受ける工場

としては、意外に手作業が多いという印象を持ったが、これこそが小回りのきく受注体制のカギなのではないかと考えた。ラインの最新式機械は、高速で大量の製品を吐き出すことは得意だが、寸法違いの製品を、いちいち装置の設定を変えて作ることは苦手である。同社では、職人さんが手を動かすことで、素早く柔軟に、多様な注文に対応できているの

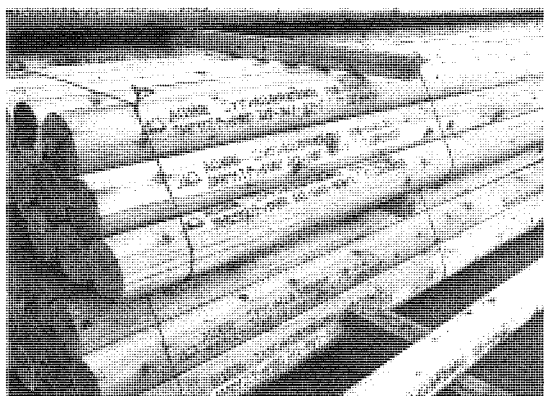
ではないだろうか。

▽新工法木杭「環境パイル」

工場内で目を引いたのは、近年戸建て住宅等の基礎工事で普及が進んでいる「環境パイル工法」に使用される、径14 cm、長さ3〜6 mの杭である(注、径級と長さは数種の規格がある)。環境パイル工法とは、兼松サステック(株)(旧社名兼松日産農林(株))が開発した、防菌・防蟻薬剤を圧入した木杭を専用機械で地面に打ち込み建物の地盤基礎とする工法で、コンクリートや鉄骨を木材に置換することでコストを下げるとともに、二酸化炭素排出を抑えて「エコ」を実現するといわれている。

マツ丸太等木杭を打設する工法は、古くから地盤改良法として港湾工事や軟弱な地盤の造成に用いられてきたものだが、環境パイルはその支持機構を明らかにすることで平成21年、(一社)日本建築総合試験所で木質系地盤補強材(木杭)を用いた工法として、業界初の第三者性能証明を取得した。また間伐材(主にスギ)を使用することで、森林環境の保全

に貢献するとしている。(参考)「環境パイル(S)工法協会」ホームページ)



環境パイル。AQ認証(優良木質建材等認証)付き

環境パイルの杭加工は、皮をむいただけの「自然木タイプ(テープ形状)」と、丸棒加工した「円柱タイプ(ロータリー形状)」があり、遠藤林業ではスギ原木から両方のタイプを製造している。自然木タイプは、表面に凹凸が残るため基礎を支持する摩擦力が高まるが、節の出っ張りが施工の邪魔になるため、バーカーの後にさらに別の機械に通して節跡を滑らかにしている。

▼「10 cm下が欲しいんです」
素材生産者の団体ということで、一同が最も関心のある原木仕入れについて話が移っていった。
同社では最盛期には7〜14 cm材を毎日原木トレーラー5、6台分も使うと言うが、「10 cm下が一番欲しい」と遠藤社長は話す。「なかなか3 m材が集まらないので、北海道からフェリーで3 mカラマツを入れることもある」とも。
径級の選別については、径級が混ざった状態で届く原木を、グラップルで仕分けしているという。以前本誌第143号で、長野県の東信木材センターでは、4〜14 cmの細物を1 cm刻みで選別することで、土木造園用杭として高い単価をつけて販売していることをご紹介したが、原木納入に際してあらかじめ細かく選別しておくことで、「価格交渉も見合わせかな？」と、一同思惑顔を見合わせるところであった。
「10 cm下が一番欲しいんです。13、14 cmはいつも余る」「福島県内では今はカラマツの伐採が少なく、スギは育ってしまつて小径木がない。今は

スギを植える人が減っているから、なくなつてしまつて大変です」



「スギの植林が減っているから小径木がなくなつて…」

再造林を促進する取り組みは林業界上げての課題であり、当組合でも低コスト再造林に取り組む事業体に対して助成を行っている。資源を循環させるサイクルが止まってしまうと、土木や造園用の杭材に最適な小径材が手に入らない、という問題にも直面することになる。
▽需要は尽きない
近年の需要としては、東日本大震

災で被災した海岸防災林の復旧工事のため大量の杭の発注があり、同業者の応援をして製品を出荷したこともあると言う。

「今は荷動きが悪くてこんなに丸太が溜まっているが、3月末になれば土場は空っぽになります」「必ずしも小径材ばかり買っている訳ではなくて、大径材も買って、注文の様子を見ながら挽きます。腐れや虫食いはねた製品も、カットして使えるところを使います」

常に客先の要望を聞きながら、工夫を惜しまず、最大限に利益を上げる努力をされているように見えた。「うちの一番小さい商品です」と見せられた長さ12 cmの楔(くさび)が、同社の仕事ぶりを雄弁に語っているように感じられた。



「1番小さな商品」

**2日目 真名畑林業(有)
短コロの集材・搬出を実践**

8月25日、研修2日目は福島県東白川郡鮫川村の青生野国有林伐採現場へと向かった。

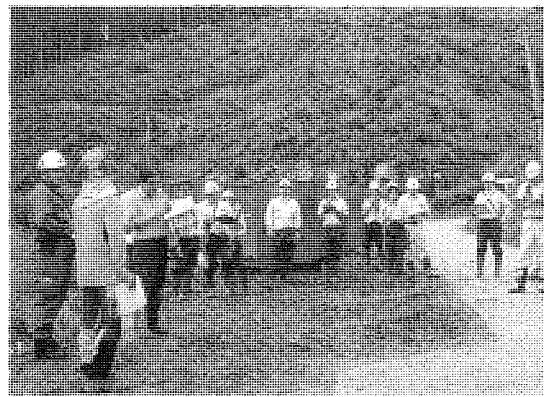
真名畑林業(有)（代表取締役菊地正人氏）は、茨城県と境を接する福島県東白川郡塙町に所在する、従業員29名の素材生産事業体である。社員の平均年齢は43・2歳と若く、うらやましいような会社だ。各種高性能林業機械を導入しており、平成28年度の事業実績は、素材生産3万6千³m³、うち間伐1万9千³m³、地拵5・72ha、植付5・54ha、下刈26・09ha、除伐24・42haとなっている（同社配布資料より）。



真名畑林業、菊地社長挨拶

▽林地残材搬出への取り組み

一行が現場土場に到着すると、同社菊地社長以下社員の皆さんと、関東森林管理局、地元森林管理署の職員の方々が集まっておられた。



林道沿いの土場には短コロを満載したコンテナが

視察開始に当たり菊地社長は、「弊社は昭和41年、当時の棚倉営林署管内に設立、平成12年には奥久慈林業協同組合を設立して共同事業もっている。D材の有効活用に向けた作業システムを立ち上げたのは、プロセッサ造材を行うようになって、『土場に残った短コロがもったいない』という思いからだ。7年前にいわき市内でチップ工場が原木の受入れを開始したのに合わせ、短コロの搬出

に取り組み始めた。今日は現場を見ていただき、ご指導願いたい」と挨拶した。続いて当組合鈴木理事長が、「自分が関東森林管理局で部長職にあつた当時、林地残材の搬出を試みたことがあつた。短コロは材の20%を占め、重さもあり、バイオマスとしてうまく活用できれば有利である。本日は現場をよく見て、勉強させていただきましょう」と挨拶した。

続いて同社総務主任・早瀬浩氏から、システムについて具体的な説明があつた。

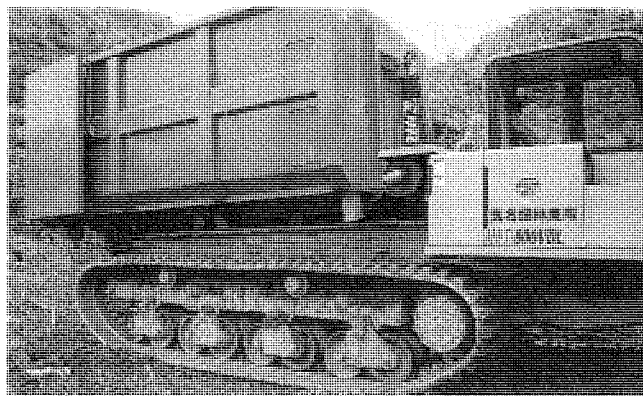
▽D材の有効活用に向けた作業システム

・これまでの短コロ出荷実績は次表の通り（今年度数量は事業途中のもの）。27年から工場着単価が上がったのに伴い出荷量が増えている。

表 短コロの出荷実績

年度	出荷量 (t)
H22	215
H23	485
H24	266
H25	297
H26	386
H27	789
H28	1,471
H29	287
	4,196

・伐採や造材作業で出てくる短コロはコンテナ付きフォワーダで集材、山土場や作業道脇にまとめておくか、場所がない場合はコンテナごと仮置きする。コンテナは1台に3〜4tの短コロを積むことができる。

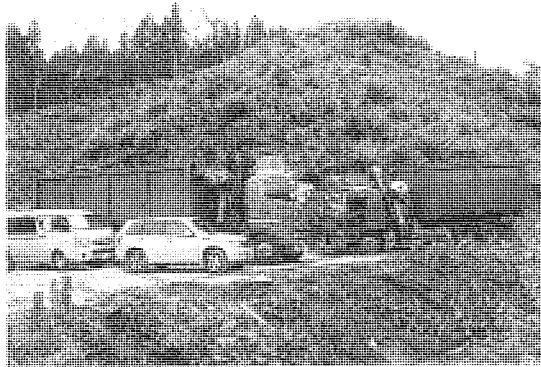


脱着ボディシステムを特装したコンテナ付き専用フォワーダ

・コンテナはヒアブ脱着ボディシステムで着脱可能。コンテナの扉は観音開きで、短コロを下ろす際はダンパアップして下ろすことができる。・用材の搬出が終わって林道沿いの土場が空く頃、短コロを山から下ろしてきて集積する。今回の伐採事業

の搬出期限は9月末で、現在作業はほぼ短コロの運搬を残すのみとなっている。

・運搬はコンテナ付き8トトラック、11トトラックで行う。大トラックには、短コロをつかみ易いよう4本爪のグラップルを装備している。



コンテナとグラップルを搭載した大小トラック

・今回の現場は、納入先の工場まで距離が38kmある。工場が近ければ、フォワーダから下ろしたコンテナをそのままトラックに着けて工場まで走れることもできるが、ここでは大きいトラックのコンテナにグラップルで積み替えてから運んでいる。1日3往復できる。

▽質疑応答

・コンテナは特注品か？
— 全て既製品。特注だと値段が高くなってしまふ。

・短コロは完全に搬出するのか？

— あまりに奥の方になると、置いてきてしまうものもある。

・短コロ販売の収支はどうか？

— 短コロは乾燥し易く、搬出まで山に置いておくこともあり、重量受入れのため今のところ利益を出すのは難しい。

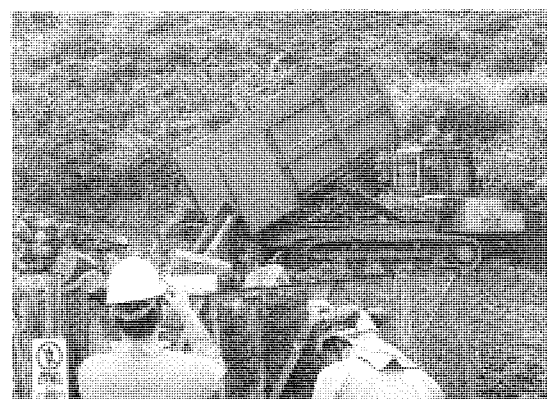
・工場側から、短コロの品質等について何かクレームや注文があったことはあるか？
— 石が入らないよう注意するほかは、特にはない。

▽集材と積み替えの実演

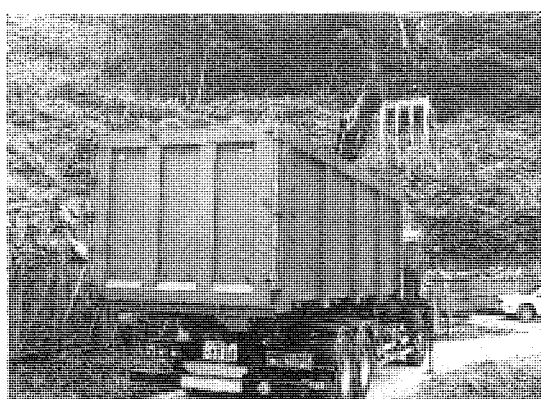
実際にフォワーダとトラックを動かして、集材とトラックへの積み込みの様子を見せていただいた。

フォワーダで作業道を登って行き、上に停めてあったバックホーにオペレータが乗り換え、短コロをフォワーダのコンテナに積み込んだ。林道脇の集積場所に降り、ダンプアップし

て短コロを下ろした。



ダンプアップで林道脇の土場に短コロを下ろす



4本爪グラップルで短コロを積み込む

次に、トラックを集積場所に横付けし、積み込みを行った。トラックには、フォワーダのもの

より大きなコンテナを装備している。グラップルは4本爪で、短コロを2個位ずつつかんで積み込んだ。満載するには45分程度かかるとのことであった。

「このシステムが一番の鍵は、短コロの積み下ろし回数を減らすこと」と早渕主任は話す。「コンテナごと山土場から直接工場へ運搬できれば理想的です」。

同社のシステムの特徴は、コンテナをうまく活用していることである。コンテナ用に特装したフォワーダとトラックを現場の状況に応じて使い分け、集材・運搬の効率化を目指していることが分かった。

* * *

今回は、森林資源を余すことなく使うというテーマで、川上・川下両方の取り組みを見ることができた。ここからヒントを得て、組合員の事業に生かされれば幸いである。

最後になりましたが、視察を受け入れてくださった遠藤林業(株)様、真名畑林業(株)様に、厚く御礼申し上げます。

トピックス

三陸中部署が 採材検討会を実施

三陸中部森林管理署は8月3日、岩手県住田町内の子飼沢国有林伐採現場において、平成29年度採材現地検討会を開催し、東北森林管理局管内の国有林・森林組合職員、素材生産者等約50名が参加した。当組合からは、営業企画部小野寺部長、同小嶋課長補佐、高橋（奈）が出席した。

初めに三陸中部署畠沢重年署長から、「山の資源を余すところなく使い切るような造材・採材方法が理想である。生産者の皆様にはご協力をお願いしたい」と挨拶があった。続いて、岩手県森林組合連合会盛岡木材流通センター木材部米澤健共販グループ長が、木材市況について解説を行った。次に、東北森林管理局より昨年度の国有林の生産状況について報告があった。それによると、主に一昨年度より4 m材の比率を高めるような生産を請負事業者に対して依頼してきたが、

その指導の効果もあり、昨年度の岩手県内国有林における4 m材の比率が、スギで56%、カラマツで57%と、良い結果となった。中でも三陸中部署は、スギで70%と順調な結果であった。この調子で、今年もさらに4 m採材比率を高めていきたいと考えている。ちなみにスギの場合、東北森林管理局管内国有林で最も4 m比率が高かったのは青森県で76%、逆に最も低かったのは秋田県の28%であった。



4 m材優先で採材するよう採材方法の検討を行う

次に、三陸中部署から採材についての指導があった。局からも強調されたように、4 mで採材できるものは極力4 m採材を行うようにとのことで

あった。合板工場では、4 m材で受け入れた場合でも、製造過程で2 mに切って使う。そのため、多少曲りの強い4 m材であっても、半分は切って2 m材+2 m材とした場合に、それぞれの2 m材が曲りの基準をクリアしているのであれば、4 m材としての造材・納材の可能性も示唆された。

その後、実際に伐倒された全幹のスギ材を前に、どのように採材するか、生産請負事業者を中心に3班に分かれて検討を行った。各班は、4 m採材優先の意向を念頭に置きながら採材方法を検討し、後でその採材方法とその理由について発表した。その後、実際に検討された採材方法に基づいてチェーンソーで玉切りし、採材した材について、それぞれ木口の腐れや虫害の有無、径級や矢高などを測定し、一般製材用材、合板用材、原料材のいずれの品質規格に合致するかなどを検証した。

許容される曲りの程度等について参加者と管理署の間で活発な議論が交わされるなど、造材方法や丸太の品質について改めて再確認を行う良い

機会となった。

第22回東北森林科学会で 低コスト造材について発表

8月24、25日、青森県青森市で開催された第22回東北森林科学会大会において、当組合嘱託職員外館聖八朗と経営企画部吉田課長が組合員の協力を得て実施している試験成果の一部を発表した。

発表題名は「林業用除草剤の主伐前散布による下刈作業の省力化・軽労化試験事例」で、(国研)生物系特定産業技術研究支援センターの「革新的技術開発・緊急展開事業」の支援を受けて実施している試験の一部成果を発表した。

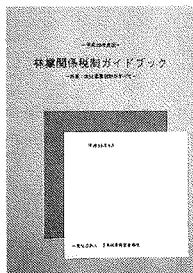
発表内容は、組合員(南)丸大県北農林(岩手県洋野町)と(株)小野寺林業(岩手県一関市)の協力を得て、平成27年夏に主伐予定林分の下層植生(ササ類)に除草剤を散布し、主伐、地拵後の10月に再造林し、2夏目までの下刈状況と、3夏目までの見込みを取りまとめたものである。ササ丈が1 m程度のクマイザサでは

おすすめの本

平成29年度版 林業関係税制ガイドブック

—林業・木材産業税制のすべて—

発行：(一社)日本林業経営者協会
(定価1,500円+税)



「このガイドブックは業務を実践するために必要な林業・木材産業関係の税制特例を中心に解説していますので、山林を伐採したり、林地を譲渡した場合、また機械や設備を購入した場合など、税金の種類に応じて制度の内容が理解できる仕組みとなっています」(本書はしがきより) …特に山林の相続税について関心の高い方も多いのではないのでしょうか？

除草剤施用による効果は1夏目から見られ、その効果は年々大きくなり、2夏目までの労働量と経費は60%弱と90%強に軽減され、3夏目までになると40%弱と60%弱に軽減される。一方、丈が2mもあるアズマネザサでは、除草剤散布のための筋刈が事前に必要であったことに加えて、草本が侵入繁茂したことにより、散布による労働量と経費は2夏目までともに増え、3夏目になってようやく通常の下刈

と同程度となることが判明した。

林野庁EPA説明会に出席

本年7月6日、日EU経済連携協定(EPA)交渉が大枠合意に至ったことを受けて、林野庁は8月8日、東京都港区において「日EU・EPA交渉の大枠合意に関する説明会(林産物関係)」を開催した。当組合からは高橋常務理事が出席した。

EUからの林産物の輸入関税は、構造用集成材、SPF製材等10品目について段階的削減を経て8年目に撤廃、日本からの輸出木材・木材製品の関税については即時撤廃が決まった。政府TPP等総合対策本部は「強い農林水産業構築のための基本方針」を示し、日本製品の競争力を高めるため、木材製品については、加工施設の効率化、競争力のある製品への転換、効率的林業経営が可能な地域における原木供給の低コスト化等を推進するとした。

「スマート林業シンポジウム」参加

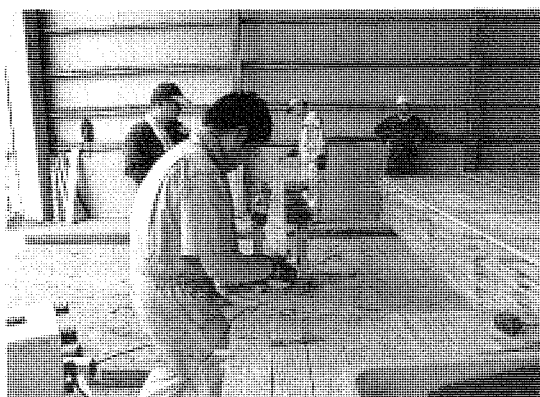
東京電機大学と三井住友海上火災保険(株)の主催による「第1回最先端スマート林業シンポジウム」に儲かる林業の実現に向けたロボット&IoTの活用」が8月2日、東京都足立区の同大キャンパスにおいて開催され、産学官関係者約200名が参加した。当組合からは経営企画部吉田課長が出席した。

スマート林業とは、情報通信技術やロボット技術等を用いて森林管理や施業、木材の流通等を効率的に行おうとするもので、今回のシンポジウムでは、ロボット技術やIoT(モノのインターネット)物にセンサーと通信機器を搭載しインターネットにつながることで、技術を駆使して、林業の生産性向上や新しいビジネスモデルを創出すること等が提案された。

カラマツ強度分布調査(第2報)

カラマツの強度分布調査(第150号参照)の実施状況をご報告する。7月に丸太150本(5産地×30本)、8月に丸太から製材されたラミナ1

008枚について、1本(枚)ずつ動的ヤング係数等を測定し、現在データを解析中。今後、産地の生育環境等を調査する予定。



丸太とラミナ強度を計測、膨大なデータを解析中

管内供給先情報

1. 協和木材(株)新庄工場では、トラック運材の利便性向上のため、月曜から土曜日24時間無人納材受け入れを開始しました
2. 津軽バイオチップ(株)工場前の丸太置場に土場を増設、また発電所の余熱利用トマの出荷を開始しました
3. 東京の薪問屋、東京燃料林産(株)から薪材出荷の打診あり、薪見本がN J素流協事務所にありますので、関心のある方はお立ち寄りください

ちよつと気になる木の話

14

低密度植栽が叫ばれる中、

困る業界はないのか？

再造林が喫緊の課題と言われており、造林コスト縮減のため、伐採・造林一貫、大苗植栽による下刈コスト低減の他、植栽本数を当たり2000本程度にする動きが盛んである。こうした低密度植栽で困る業界はないのか。

既に困っている品物がある。とある東京の竹間屋に伺った時である。品物が無く困っていたのは足場丸太であった。足場丸太などこの時代には使わないのではと訊くと、郊外型ニュータウンから都心回帰の住宅需要は不整形地が多くなり、定尺物の鋼管パイプは切断しなくてはならず、一回で使い物にならなくなるといふ。この結果再び足場丸太が必要とされているが、物が無いという。今までは当たり1万本植えの尾鷲のヒノキの除間伐物がある時は、東京から出張して調達していたが、今はそ

んな若い造林地は無く、肩でかっ

いで搬出してくれる人もいないという。それなら和室需要の減少で床柱が売れない北山スギでどうかなど助言したら、番線が結束するので、スギは柔らかくてダメということだった。1万本どころか、3500本でもなく、2000本ではとても無理で、困る事態は続くこととなるだろう。

次は造園用資材である。造園用の小丸太は6〜8cmが主流である。この径級で一定の長さの品物を確保するには、密植多間伐からの品物となる。もちろん、かつての化粧垂木のように密植皆伐でも可能ではあるが、長さを確保するには難しい。もちろん、丸棒加工すれば多少太くても削れば出来るが、削り代が高くなるので時間と歩留りでは不利である（丸棒加工機を見た人は分かるが、極めてスピードが遅いのである）。公園等の柵に大量に使われているが、この発注

寸法を大きくすることを発注側に要望するのも一つの方策である。

加えて北国での雪吊り用の丸太がある。金沢の兼六園が有名だが、樹木の枝に合わせて立てなければならぬので、9m、10・5m、12m等、山から切り出すしか方法はない。問屋や小売店にあるはずはないのである。これも小径木の長材で、密植でないとなかなか調達は難しい。北国では、今だに有名な庭園を中心に需要は多い。

この他にも、小径木丸太の用途は多い。遊歩道の柵、水辺の土留杭丸太等、よく周囲を眺めれば沢山ある。意外なものを北海道で見た。はさ掛けの丸太である。今時代ハーベスタで稲刈りするのに時代遅れではと思ったが、話を聞いてみたら種籾用のはさである。種籾用は天日で乾燥させるとのことである。へえ〜である。

様々な小丸太需要が何故木材業者には分からないのが謎である。それは、造園用を中心として、竹問屋が供給を担ってきたからであ

る。立木竹という森林資源上の用語はあるが、木と竹は別の業界となっている。「木に竹を接ぐ」のは異質な物の意味で、できないことを言う。実際に木材業と造園業との付き合いも薄い。もう一度連結しなくてはならない（かつての製品市売りでは竹間屋の浜があったと聞いている）。

6〜8cmより太い9〜10、11〜13cmの土木用資材も原木が不足している。密植の若齢林が少ないことが根本的問題であるが、バイオマス需要の高まりで、小径丸太の選別が面倒くさいとする素材生産者が増えていることも一因である。常に需要はある。とりわけ公共事業の発注の関連で、秋口から春先までがピークである。14〜16cmは合板メーカーは取らない傾向が強まっているが、逆に昨年のように母屋角不足は深刻である。

最後に、低密度植栽への動きが加速する中、少しは密植多間伐をするのも将来を見据えた投資の一つではないかと…思う頃である。

平成 29 年 8 月 分 の 販 売 実 績

樹種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	7,958	91.4	108.1	12,523	93.5	239.4	20,482	92.7	162.6
カラマツ	2,560	93.3	180.8	886	140.2	166.2	3,446	102.1	176.8
アカマツ	2,456	94.9	425.5	113	90.2	171.4	2,569	94.7	399.4
その他針葉樹	0	*	*	0	*	*	0	*	*
広葉樹	0	*	*	85	*	309.7	85	*	309.7
合計	12,973	92.4	138.7	13,608	96.2	232.3	26,582	94.3	174.7

樹種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	5,445	89.5	113.4
カラマツ	1,739	111.0	125.4
アカマツ	1,463	127.1	199.0
合計	8,647	98.3	124.9

樹種	今年度累計			
	合板用 (m ³)	その他 製材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス (t)
スギ	47,709	56,557	104,266	29,821
カラマツ	15,354	3,335	18,689	8,105
アカマツ	12,833	673	13,506	9,886
その他針葉樹	0	0	0	0
広葉樹	0	159	159	0
合計	75,896	60,725	136,621	47,812
目標達成率 (%)	41.0	52.8	45.5	47.8
計 画 量	185,000	115,000	300,000	100,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成 29 年 8 月 の 需 給 動 向】

- 長雨や豪雨により出材に遅れあり、またお盆休みも加わり全体的に出材が遅れている。
- 虫害状況もあり、製材用原木は不足状況。虫害が落ち着く9月からは出材が増加する見込み。
- 集成材用、合板用原木は順調に流れている。製品の動きも順調のため、この状況は当面続く。

耳からウロコ

プレハブメーカーの意外な生い立ち
木造軸組にプレハブメーカーの参入が続いているが、その生い立ちには林業とは深い関係がある？ 思いつくままにちよつと耳からウロコである。

ミサワホームは三澤木材(株)が発祥なのはご存知の通りである。プレハブ参入のきっかけは、南極越冬基地である。極寒の地で、建物は熱伝導率の低い木材で、短期間で建設する必要があったからであるが、この技術的指導は林業試験場次長をした山井良三郎先生である。三澤氏と山井先生二人とも新潟出身なのは何かの縁かもしれない。

次は大和ハウスである。鉄骨プレハブで有名だが、社名の「大和」とは大和の国、今の奈良県で、創業者の石橋氏の故郷である。石橋氏の生家は、現在も吉野中央木材市場を経営しており、生粋の木材業と言える。

次に積水化学、セキスイハウスであるが、この2社は元々同じと想像できるが、旭化成も元は同じである。大手プレハブメーカー3社ともは意外だが、何とチツソ(日本窒素肥料)からの化学メーカーとしての発祥である。チツ

ソの最初は曾木電気(株)で、曾木電気とは鹿児島県の山村、大口村に設置した川内川の水力発電所で、余剰電力で熊本県水俣市に工場を建設し、カーバイド製造したことから始まる。何か関係あるのか確かではないが、水力発電所は国有林の森林内かな…。そういえば大口管林署がありました。

プレハブではないが、名前からは分からない意外な住宅メーカーもある。スウェーデンハウスは、元はトーモクの工場内からである。トーモクとは東洋木材で、その前は北海製罐で缶詰用の外装木材の会社であり、木材企業である。カタカナの会社は漢字を縮める場合が多い。中京地区にあるウッドフレンズは、元はニチハの住宅部門であった。ニチハは日本ハードボード工業で、繊維板グループであり、名古屋港湾にあった旧中村合板の工場も引き継いでいる。

さらに、住友林業は愛媛県別子の山林経営、古河林業は秋田県阿仁の山林経営と、林業そのものである。

財閥系では三井ホーム、三菱地所ホームがあり、両方とも2×4住宅であるが、国産材利用に熱心に取り組んでいる。残念ながら分譲系は大工・工務店、不動産系が多く、林業、木材産業出身はあまり見当たらない…。

プレハブではないが、名前からは分からない意外な住宅メーカーもある。スウェーデンハウスは、元はトーモクの工場内からである。トーモクとは東洋木材で、その前は北海製罐で缶詰用の外装木材の会社であり、木材企業である。カタカナの会社は漢字を縮める場合が多い。中京地区にあるウッドフレンズは、元はニチハの住宅部門であった。ニチハは日本ハードボード工業で、繊維板グループであり、名古屋港湾にあった旧中村合板の工場も引き継いでいる。